

編集室から

捨てる神あらば、拾う神あり。と申します。

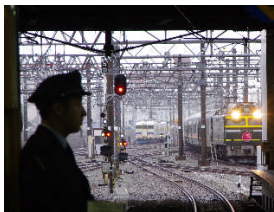
本ニュースレターに溝口さんにシリーズで投稿いただいておりますJR九州の豪華寝台列車「ななつ星」。今月号はいよいよ車内でのディナーです。

一方で、来年春に廃止が決まっている寝台列車が3本。JR西のトワイライトエクスプレス・JR東の北斗星・カシオペア。いずれも札幌行きの豪華寝台列車として長距離を結んでいます。北海道新幹線の工事が本格化する中、在来線と共用区間となる青函トンネルを深夜に駆け抜けるこれらの列車があると、工事時間がとれないためと耳にしました。

日本海側を走るトワイライトは、北陸では日中の通過となり、時々見かけるもののその人気から予約が取り難く、眺めるだけの憧れの存在でした。

処が先日、急な北海道出張で調べたところ、札幌到着時刻が直行便と同じで、運賃が若干安いことが判明。ダメ元で手配を試みると、Bコンパートメントが取れました。しかし、5日以上前の予約が要るディナーは4日前でNG。やむなく駅弁コースに。

当日は、太平洋側を中心とする各地で記録的な大雪の日でした。北陸は殆ど降雪が無い年で、20分遅れで金沢を出発。



走り出して後、朝食の予約に来られた食堂車の職員の方から、大雪で乗り継ぎ不能になった乗客がありディナーにキャンセルが出たのでどうかという報せ。



チャンスというものは、想定外の方法で登場するものだとつくづく思うのです。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2014/03

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2014/03

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

弥 生



我が家にて
by hama

濱のつばやき 『挑戦』

ソチ・オリンピックが終わった。振り返ってみれば、マスコミや世間の予想・期待とは裏腹にさまざまなドラマがあった。

オリンピックに出場しようかというレベルの選手のインタビュールほど、参考になるものは無い。変化の激しい現代において、それでもなお普遍的なものがあり、それを掴まんと日々ひたすら向き合っている人の教訓である。

今回の大会ではないが、金メダルを狙っていた北島康介選手のインタビュールが脳裏から離れない。

どうしてそんなに練習するのか？というインタビューアールの素朴に過ぎる問に対して、彼は淡々と応えていた。「ここまで練習すれば金メダルが取れると判っていたら全員がそこまでしかやらない。それが判っていないから、自分が納得するまでやり続けている。レースのスタート台に立ったとき、『ああ、あの時もつと練習できたかもしれない』と思った瞬間、身体が動かなくなり、そのレースは全く結果が出ない。スタートの瞬間に、一切の迷いを無くするために日々精一杯やっているんです。」と…。

このひとつの返答に、どれだけ学びの種が隠されていることが…。

オリンピックのような一発性ではなく、長年を掛けて偉大な記録を打ち立てたイチロー選手と共通しているのは、運動競技に直接影響する肉体を鍛えるために日々のトレーニングがあるのではなく（彼らはそのレベルはとくに通過している）、肉体のトレーニングを通じて、いざという瞬間のために肉体と精神を鍛えていたのだ。肉体競技のために肉体を鍛えるという短絡的な素人発想には在り得ない基準の世界…。

そしてさらなる学びは、結果が出るまで決して諦めないということ。

事業も含めて「失敗」といわれる場面がある。それを怖れるがあまり、手足が縮こんでしまっている人を見かける。おそらくほとんどの人は、「失敗の方が大多数で、成功はほんの一握りだ」と考えているのではないが、果たしてこれは真実なのだろうか。

結果が明確なスポーツ競技を始め、さまざまなプロジェクトで「うまく行かない状態」に遭遇する。その時、その状態のまま諦めてしまったら、それが「失敗」なのではないか。どんなにうまく行かない状態に陥っても、その状態を抜け出すべく歩みを止めなかつたら、やがて事態は変化する。それを何処までも続けて行った先にあるのは、成功・目標達成ではないのだろうか。

つまり失敗とは、うまく行かない状態のまま放棄すること。であって、極論すれば「失敗という事態は存在しない」とも言える。あるのは、「失敗という認識」の方であって、それはつまり諦めであり、その先により善き結果を受け取ることの放棄でもある。諦

めと、より善き結果の放棄という選択結果が、この世に累々たる「失敗」の山を積み上げている。

さらに言えば、この選択は、その先を歩める自分というもの、あるいは自分の可能性の否定であり、夢や希望を自ら捨てることだ。そんなことを繰り返していて自信がつかはずは無い。

一流の人は、他人から見れば過酷に見える状況に陥っても決して諦めない強靱な精神・もう一步を踏み出す折れない心を獲得するために、猛烈なトレーニングを重ねる日々を置いている。

かつて、過酷な状況と感じたある体験に出逢い、この事を身を以って感じて以来、個人的には「諦めない」というよりも「途中経過である。正すべきところを見出し、繰り返し進むよう進め！」と感じるようになった。誰にでもスランプはある。スランプと考えるか失敗と考えるかの差は大きい。

今回、このことを明確に示してくれたのが、浅田真央選手と彼女の精神を一晚で立て直したコーチだった。

この絵はフェイスブックの知人から紹介された画像だ。この絵を見て、上下の人に何と声をかけるだろうか。

上の人には「頑張れ！」。下の人には「何故、そこで諦めるか！宝は目の前だ！」。というのが一般的な感想であろう。しかし、それはほんとうか？

この絵は、人間の立場で描かれてはいない。人間は、どこかに宝物があるか判らない。それが判っているのは、神様だけだ。つまり、この絵は神様の視点で描かれていることに気付く必要がある。

ならば、下の人に「もう少しで宝に到達できるのに！」という前提でアドバイスすることは人間には不可能なのである。

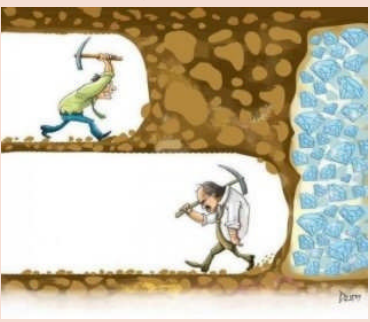
下の方は、到達していないという状態を固定化させた人。上の方は到達しようとして歩み続けている人。という状態の違いがあるだけだ。ならば、どのように声を掛ければ良いのか。

さまざまな成功法則を紹介する書籍が所狭しと書店に並んでいる。しかし、それらの内容を突き詰めれば一つに集約される。

曰く「成功するまでやり続けること」。

言われてみればアホらしくなるほど単純な法則だ。しかし世の中は、この絵の下の方が大多数ではないか？上の方が自分の五センチメートル先で宝を掘り当てたことを後から知って、俺ももう少し頑張れば」と悔しがるか、何か別の理由を探し出してブツブツ言い訳を述べ続けて酒場の隅で酔いつぶれている。

このアホらしくなるほど単純な成功法則を素朴に守り通した人だけが、栄冠に輝くのだろう。成功法則がアホらしく感じられる時代だからこそ、成功者は残念ながら極少数に限られているのかも知れない。



深夜零時過ぎ、本社近くの交差点で総務部長の手が上がる。強い意思表示の先には高級車の個人タクシー。レザーシートに体を預け、ほっとする社長と私。これでようやく帰路につける。

待つこと30分。今日も彼はタクシーを選別した。社長と私に決定権はない。緑の車体¹には目もくれず、悠然と数台を見送る。祝杯でほろ酔いの時も、先の見えないトンネルに入った闇夜も、それは変わらなかった。狙うのは、レクサスかフーガ、妥協してクラウン。暗闇の中、白い大きなボディと、ディスプレイヘッドライトを頼りに。

総務部長のこだわりはホテル選び²にも表れる。その役目は誰にも譲らない。数日ごとに宿を変え、ある日はフロントレディ目当てで池袋のビジネスホテル³、ある日は秋葉原のなにが目当てかさっぱりわからないビジネスホテル、そしてある日は江古田のキャバクラ⁴が近くにあるウィークリーマンション。こだわりがどこにあるのか、常人には理解できない。

総務部長は不思議である。ふらっと債権者のメガバンクへ立ち寄りたり、消費者金融会社へ単身乗り込んだりしたかと思えば、その足で貸付先へ取り立てに行く。社員に厳しいリストラ宣告をし、横領まがいのことをした元総務部長を問い詰め、以前の上司からの愚痴を我慢強く聞き、現在の部下からはコテンパンに怒られる。突然、肩に腫瘍ができて入院したこともあったが、最強のストレス耐性を誇り、あらゆるクレーム処理のクーティリティプレーヤー兼社長の懐刀となった男。

最強弁護士軍団と再生コンサルとのシビアな三者ミーティングの最中に、とある重要人物が見せたわずかな隙を見逃さず、後でそのクセを繰り返し再現したのも総務部長だった。そう言えば、“細かすぎるけど伝わるモノマネ”も彼の得意技だった。このように、あえてふざけた振る舞いを演じることで、辛い中にも遊び心をなくしちゃいけないよと総務部長は言っていた。いや、演じてはいない。地だ。まさに「明るい民事再生」を地で行く男。

時を経た今、彼がまた困難な状況に陥っているらしい。一旦、人事異動で離れた総務部スタッフと、再度上司と部下の関係になったと聞く。相変わらず木っ端微塵にされている経営企画室長。それが似合う。

1：タクシー無線グループとしては国内最大規模を誇る東京無線タクシー

2：当時の我々は賃貸契約の審査が通らず、気分転換も兼ねてホテル等を転々としていた

3：2005年11月に構造計算書偽造問題で営業停止となりその後2009年に再オープン

4：客引きのお兄さんが「キャバクラいかがですか？」といつも声を掛けてくれた。蚊の鳴くような声だったので一度も入ることはなかった

ソチでの冬季オリンピックも終了し、慢性的寝不足からやっと日常に戻った感じします。始まるまでは特に興味がなかったのですが、各国のアスリートたちの姿に勇気と元気をもらいました。心からの尊敬と感謝の拍手を送りたいと思います。ありがとうございます!!

さて2014年が始まって早々にいろいろと人の問題などで苦労する事が多いのですが直近でも、失意に落ちてしまうことがありました。今年の9月に新規オープンする石川県のアンテナショップの運営委託の公募に応募し、二週間という民間企業ではありえない(?)作成期間で事業計画書をつくり提出しました。大学院で『アンテナショップの役割と将来図』を研究テーマとしていたのでまさに私にとっては、何が何でも取りたい企画でしたし、それをハブにして石川県の食材を東京もしくは世界に紹介する出島にしたいと意気込んでおりました。しかし結果は落選。またその理由がまた何とも不可思議なもので『企業としての規模が小さい』ということでした。であれば、最初の応募条件として年商100億以上とか記載してほしいと考えるのは私だけでしょうか?確かに、私の計画上では初年度は赤字を計上しています。なぜならアンテナショップという性格上売れ筋ばかりを置くわけにもいきませんし、地場企業にとってトライ&エラーができる場であるべきと考えていたからです。しかし、それでは当然事業運営する意味がないので、発信基地として首都圏の飲食店ネットワークを形成し、そこに商材を卸していく商社事業としてビジネスを展開していくという建てつけでした。選定条件においてそのような項目が優先されるのであれば、小さくても夢と希望を持った企業はいつまでたっても企画を具現化できません。身の丈に合わない事業はするなと言われていたようですごく悔しい思いをしています。

そんな一件から、私は『企業の規模と資質』についてを考えるようになりました。確かに小さい企業は事業としての安定性、従事する人材に安心を提供できるかという点で不安要素はあります。風が吹けば桶屋は儲かるかもしれませんが、うちの会社は吹き飛ばされるかもしれません(笑)。私もどこかで規模を拡大していくことに邁進していた感もあります。

しかし、長く愛される会社って何か?を考えてみると、その企業の資質という点にいくわけなんです。私にとっての大切な企業の資質とは『よりよい未来を創造する事業活動を行っているか?行おうとしているか?』の一点につきます。ニーズやウォンツというマーケティング用語もありますが、そういうものではなく『世の中の人たちを幸せするためにできることは何か?』という言葉なんです。まだまだ迷うこともあると思いますが、一緒に働くスタッフも、これを共感することができ、そして共に成長していくことを喜びとを感じる人が集まる集団にしたいと思った2014年の冬でした。

何か決意表明になっちゃいましたね。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

ななつ星の旅(その5) 静岡県職員 溝口 久

由布院の伝統芸能を堪能した後、客車に戻りいよいよ晩餐の始まりだ。ドレスコードはセミフォーマルとある。出発前に式典があったことから、ずっとバンキシャで紹介されたTAKEO KIKUCHIでしつらえたスーツのままだ。

1号車のラウンジカーに私共の晩餐の席は用意されていた。この間、列車は由布院駅と南由布駅を往復している。列車での旅であるのに駅に止まったままという訳にはゆかない。

でも、晩餐会に出される食器は足の高いワイングラスに始まり、有田焼の窯元「清六窯」の白磁の器、ナイフフォークはノーベル賞の晩餐会にも提供されている新潟県燕市にある山崎金属工業製と、テーブルから落とすようなことがあってはならぬ逸品ぞろい。

そんなことで、相当にレベルの高い揺れの制御が求められる。

これには、新日鐵住金が開発したアクティブサスペンションが活躍している。車両に備えられたセンサーで車両の振動を検知し、逆方向の力をアクチュエーターで発生させて振動を打ち消すというものだ。

揺れを極力抑えた車両での晩餐が始まった。ななつ星の中では唯一の晩餐だ。二日目が霧島温泉の田島建夫マインド息づく「忘れの里 雅叙苑」。地域文化の中心となるのが「食」、それを見せかけだけの料理に仕上げるのは簡単だが、生産から調理に至るまで、すべて自分たちの手でやってしまおうというのが、田島流だ。三日目は鹿児島市の「仙巖園」の謁見の間で味わう島津家薩摩御膳である。こだわり抜いた晩餐が続くことになる。

さて、ななつ星を任されたのは大分市にある「方寸」だ。「なつかしい未来~九州~風土に育まれた人・物・事を今にそして未来に」をコンセプトに、おしながきには「大分でお過ごしいただく、七つ星の旅、最初の晩餐。今宵お届けする料理は、豊国の伝統にちなんで「土」から始めます。あらゆる命を宿し、育み、やがては受け止める母なる大地。すべては大地にはじまり、大地へと還る。人生も然り、旅もまた然り...。」とある。

最初に「土の景」としてサトイモの小芋を皮のまま蒸し、その皮を剥いて食べる「きぬかづき」が出された。サーモンで形づけられた花はサザンカか？晩秋をイメージさせるひと皿になっている。次には「木の景」で意表を突く「椎茸のおつゆ」、具は入っていない。

この器はなんとまちづくり関係で親しくさせていただいている静岡市蒲原町の片瀬さんの息子さんの作品こと、汁に限らず料理を引き立てる力を持つ陶器だ。



次は「海の景」でイカのマリネを本マグロで包んで出されてくる。続くは「磯の景」、アワビにきのこが添えられ塩釜にしている、キッチンペーパーの端を引っ張ると塩釜が崩れ一気に香りが立ってくる。そして「波の景」真鯛と車海老を昆布で蒸し、その昆布を船に銀杏、しめじ、白菜が乗っている、秋の食の宝船の趣だ。次に出てきたものが意表を突く鑄物の蓋付器だ。さて何が現れるのか、おしながきには「浜の景」関アジの一夜干しのパスタとある。刺身でうまい関アジを一夜干し、しかもパスタに和えて出してくるとは驚きだった。

山、海の幸の続き最後に里、そう「田の景」としてご飯に漬物、「沖の景」の止椀で締めくくる。

適度な量がタイミングよく運ばれてくる。マスコミに食の量が多すぎるというような記載があったが、料理の後に出来るデザートが満腹感を煽ったのかもしれない。

食事が終わるタイミングで超サプライズが待っていた。

ななつ星の旅の一ヶ月ほど前にJR九州の秋山さんから連絡が入った。「10月15日は結婚記念日ですよ。お花、ケーキ、シャンパンが御用できますが如何でしょうか？」口に入るものは十分に用意されているだろうから、花にしてもらうことにした。もちろん有料ではある。

「その花はどの場にいつのタイミングにしましょうか？メッセージカードのコメントは？ラウンジカーにはピアノが用意されていますので、リクエスト曲は？」とおもてなしのメニューが続く。これはサービスではない、おもてなしである。この二つの違いは何か？サービスにはお金が伴い、それは仕事と言うべきものだが、

もてなしは「思いやり」から派生しているものと思うし、そこに人のセンスが伴う。極意なのかもしれない。

花を出すタイミングは夕食後、デザートの前にした。部屋に置いておいておくという選択肢もあったが、他のお客が見ている前の方がいいに決まっている。入れたメッセージは内緒、、、。

花が出され、メッセージを読み終えた頃、斎藤和義の「歌うたいのバラッド」がピアノから流れたと同時に、頬に涙が伝わっていくのが見えた。(つづく)

